

(大口市鳥巢手向山)

位置と環境

手向山遺跡は、大口市鳥巢手向山に所在する。遺跡は、南北に細長く展開する大口盆地のほぼ中央を西流する川内川の支流羽月川の西側丘陵上に位置する。海拔約210m、山野川と羽月川の合流点の西方約600mにあって、今は原野である。

調査の経緯

手向山遺跡は、縄文時代早期の押型文土器の最終末型式である手向山式土器の標識遺跡として古くから知られているが、これまでに正式な発掘調査が行われたことのない遺跡である。

手向山遺跡をはじめて学界で紹介したのは、1932年、当時、大口中学校（旧制）で教鞭を取っていた木村幹夫であった。

木村幹夫は、『考古学雑誌』の中で、大口盆地内の他の遺跡とともに、手向山遺跡の若干の押型文土器の拓影を図示し、同地の開業医でのちに鹿児島県の考古学界において指導的役割を果たした寺師見國が発見したことを述べている。

遺構と遺物

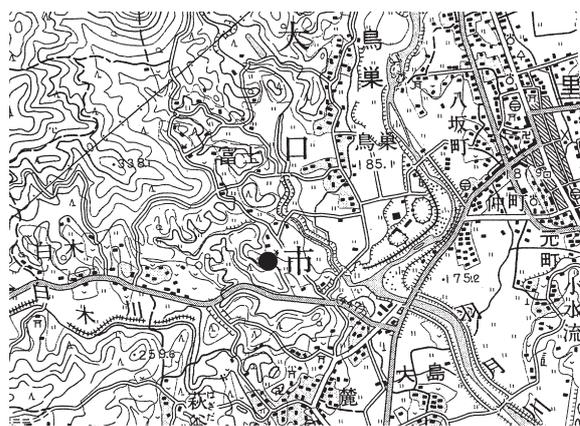
正式に発掘調査が行われたことのない遺跡のため遺構の発見はない。採集遺物中には、多数の押型文土器と、これに伴う若干の撚糸文土器や縄文土器がある。そして石鏃・石匙・石斧・石弾などの石器が採集されている。

特徴

本遺跡採集の資料から、南九州の押型文土器終末期の様相が把握され、これらを「手向山式土器」と呼称されるようになった。

手向山式土器は、中部地方で発生し東北地方南部から九州にいたる日本の東西へ分布圏を拡大した超広域な土器型式である押型文土器の最終末型式の土器である。九州へ伝播した押型文土器は、本州では見られなかった平底の土器となって、しばらく存続し、やがて手向山式土器となって押型文土器文化は終焉を迎える。

手向山式土器の最大の特徴は、文様における押型



第1図 手向山遺跡の位置

文手法とそれ以外の施文手法（沈線文・ミズばれ文・同心円文など）の導入であり、しかもその手法が主文様を構成することである。こうした現象を、従来は、衰えゆく押型文土器とその文化が、新興の曾畑式土器や轟式土器の強い影響のもとに手向山式土器が完成したと考えられたが、南九州のアカホヤ火山灰を鍵とする層位的効果によって撤回を余儀なくされている。

手向山式土器は、南九州を中心に、九州各県に散在的に分布するが、海岸部よりも山間部に多い。沈線文を持つものはこの分布圏の全域に認められるが、ミズばれ文や同心円文は鹿児島県を中心とした南九州域に限られる。

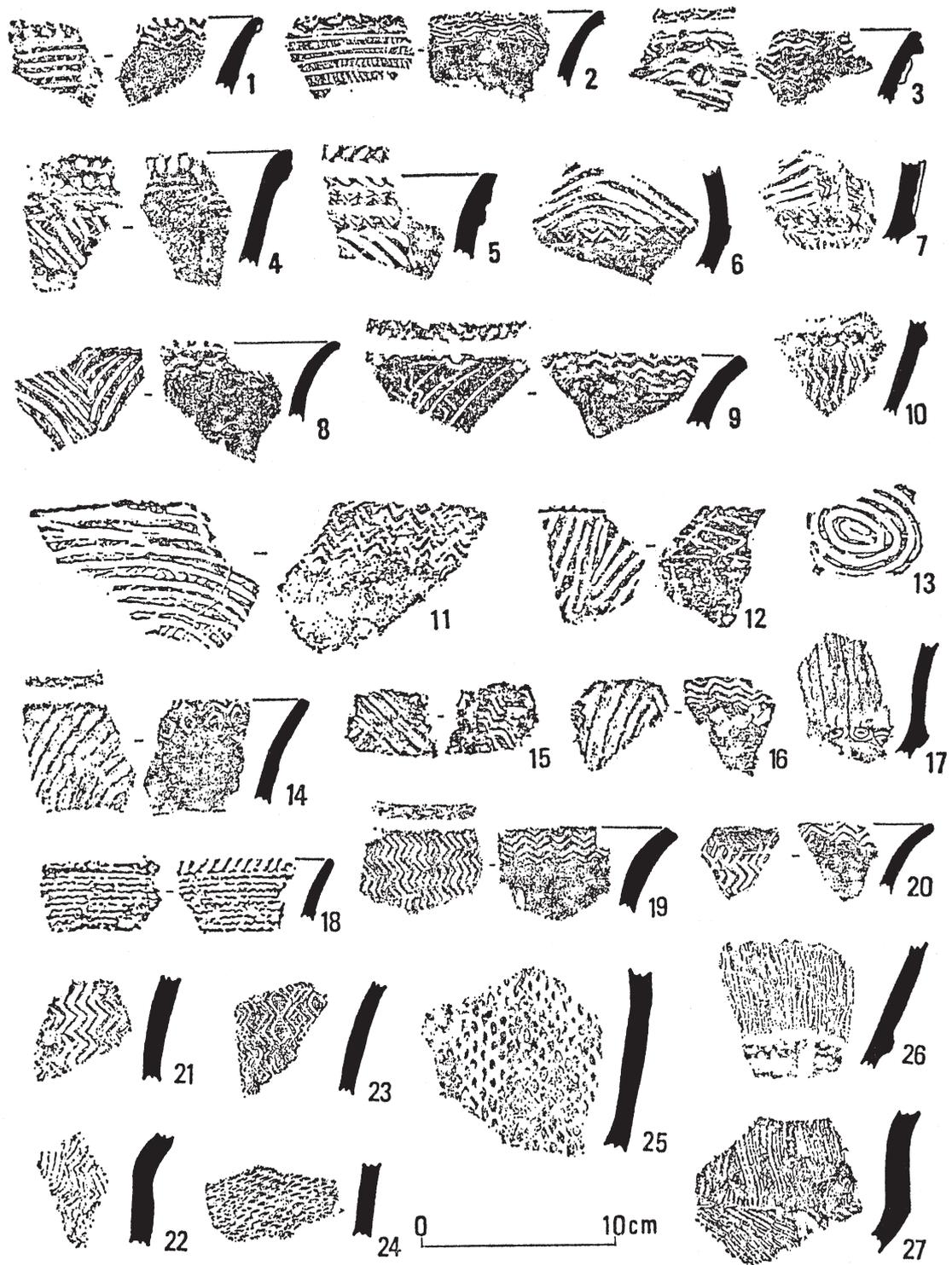
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県歴史資料センター黎明館に寄託収蔵されている。

参考文献

木村幹夫1932「鹿児島県大口盆地の遺跡」『考古学雑誌』12巻10号

(新東晃一)



第2図 手向山遺跡出土の土器